会話者の視点と身体動作説明との関係の探索的検討

山元恵美子

(関西大学大学院心理学研究科)

キーワード: 説明, 視点, 身体動作

Exploration of relationship between interlocutors' perspectives and their explanation of body movements

Emiko YAMAMOTO

(Graduate School of Psychology, Kansai Univ.)

Key Words: Explanation, Perspective, Body movement

目 的

コミュニケーションの参加者が、お互いが共有していると推定している情報は共通基盤 (common ground) と呼ばれる (Clark, 1996)。Clark & Wilkes-Gibbs(1986)は、曖昧図形の形状を伝達する対象指示課題を用いて、2者間のコミュニケーション過程を検討し、情報発信者が曖昧図形の形状を表現し、これが受信者に受け入れられるかどうかによって、情報の修正や、新たな付加を行ない、共通基盤を構築していくモデルを提案している。しかし、これまでの対象指示課題研究では、曖昧図形が指示対象として用いられてきたため、身体動作の説明に必然的に含まれる視点の違いは問題とされてこなかった。本研究は、視点の違いによって会話にどのような特徴が現れるのかを、説明者の視点の操作と会話トランスクリプトの検討より、探索的に明らかにすることを目的とする。

方 法

実験計画 他者の動作を説明する「他者視点群」、他者の動作を覚えた後、自分でいながら動作を説明する「自己視点群」、さらに、他人の動作を見ながら、かつ、自分でも動作を行うことのできる「他者視点自己視点混合群」の3群。

実験協力者 大学生と大学院生 18名。9組の友人同士のペアとして参加 (各条件とも、男性ペア1組、女性ペア2組)。各ペアはランダムに3条件に割り当てられた。

実験時期 2012年11月

説明材料 刺激の動作をする人物 (以下、動作主とする) に、予め実験者が考えた、5秒ほど右手を動かす異なった動作を20個してもらい、それらをビデオに撮影した。それら20個の動画を大学生6名 (男性2名、女性4名) に個々に見てもらい、画面に映っている動作を口頭で説明してもらった。そして、1つの動作の説明が終わるごとに、説明の難易度を5段階で評価してもらい、その結果をもとに、説明の難易度の平均を算出し、難易度の平均に近い9つの動画を使用した。さらに、そのうちの5つをランダムに選び、第1試行から第5試行までの実験刺激として利用した。

手続き 実験はペアごとに個別に行った (全9ペア)。一方を説明者、もう一方を解答者役にランダムに割り当てた。部屋をパーテーションで2つに区切り、説明者には1つの動画を、解答者には、説明者に提示した動画を含む9種類の動画を一齐に、それぞれ繰り返し表示した。説明者の画面上に表示されている動作を、解答者が9つの動画の中から選べるよう、2人で会話をしながら解答に辿りつくよう指示し、提示する画像を変えて5試行繰り返した。選択した画像と提示順序は全ペア共通とした。視点の操作は、説明者に対してのみ行った。他者視点群 (3ペア) では、椅子に座り、動画を見ながら、体を動かさずに説明するよう指示した。他者視点自己視点混合群 (3ペア) では、立った状態で、動画を見ながら、体を動かして説明するよう指示した。自己視点群 (3ペア) では、

体を動かして動作を覚え、覚えたら画面を変え、動画を見えない状態で体を動かしながら説明するよう指示した。なお、解答者は他者視点群の説明者と同様に全ての群において、膝の上に手を置き、体を動かさないようにして会話するよう指示した。実験課題中の会話は、ビデオテープをもとに実験者によって書き起こされた。

結 果

会話トランスクリプトを、話者の視点を反映していると考えられる動作方向の記述に注目して検討した。説明者の発話の様子には、各条件によって異なる特徴が見られた。他者視点群において、説明者は、他者視点での説明、つまり見たままの状態の説明が多く見られた。他者視点自己視点混合群と自己視点群の説明者の発話には、自己視点のみでの説明が多く見られた。例えば、動作主から見ると時計回りで腕を回した動作で、他者視点群では「反時計回り」、他者視点自己視点混合群と自己視点群では「時計回り」と表現するのが見られた。この結果から、視点の違いが説明に反映されていたことがわかる。解答者の発話にも、各条件によって異なる特徴が見られた。他者視点群と他者視点自己視点混合群において、ほとんどが他者視点によるものであり、自己視点群では、自己視点によるものが多く見られた。例えば、動作主から見ると時計回りで腕を回した動作で、他者視点群と他者視点自己視点混合群では「反時計回り」と、自己視点群では「時計回り」と表現するのが見られた。また、自己視点群と他者視点自己視点混合群の会話で、視点の違いから会話に齟齬が生じるケースが見うけられた。例えば、動作主から見て腕を時計回りに回している場合、自己視点群の説明者は時計回りに腕を回しているため、その動作のことを「時計回り」と表現するが、画面から見るとその動作は「反時計回り」になるため、解答者は「時計回り」の動作を見つけることができなかった。

考 察

身体動作説明には話者の視点が織り込まれており、その円滑な説明には、会話において互いの視点を調整する必要がある。この調整は、説明者と解答者が、会話を通して、お互いがどのような状況におかれて、どのような視点を持っているのかを推測し、視点に関する共通基盤を構成することで達成されているものと考えられる。

引用文献

- Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge University Press.
Clark, H. H. & Wilkes-Gibbs, D. (1986). Referring as a collaborative process. *Cognition*, 22, 1-39.

本研究は2012年度関西大学文学部に提出した卒業論文「動作の説明における自己視点と他者視点の影響」の一部である。